維持会員の声

北朝鮮脱出の記憶

遠藤 みえ子

貴会の趣旨に賛同して、入会してもう 10 年目になりますが、最近はつれあいの末期ガンの介護があり、個人的に note というブログを始めた経緯もあり、その上第一土曜日は主催者である「英語の会」と重なるため、例会に参加できず、心苦しいことでした。

2012 年に長崎出版から出た、北朝鮮からの引揚げ回想録が、2019 年に幻冬舎から自作英訳本として、出版されました。この日英本 2 冊が共に、米国議会図書館に所蔵されております。この 7 月末から、英語版は「電子書籍」としてアマゾンなどで販売され、日本語版の方は、来年 6 月、佼成出版社から、中高生向けに新装出版されることになっております。

長年児童文学に関わってきましたが、私が 5～6 歳で目撃、体験したことを、書き残そうと始めたのは、20 代後半からですが、北朝鮮というだけで出版社には拒否されました。

2010 年、私の周辺で 40 歳前後の男性が 3 人自殺し、私の親たちの世代は、戦争と戦後の苦難を必死に乗り越えて、今に繋いできたのに、どうして簡単に死ぬの？ 私の母は 37-38 歳で、乳飲み子を含めた 6 人の子を抱え、北朝鮮の零下 23 度の酷寒の中、銀行閉鎖でお金なし、教員宿舎を追われ住まいなしで、1 年 2 ヶ月耐え、何とか帰国をなしとげて、今の私と私の子や孫があるのに、と大いに苛立ちました。

長く出版は諦めていたものの、6 人兄妹のうち、4 人が亡くなり、最年長で 70 歳となった私が書き残さねば、と 2010 年に『脱出まで』と題して、自費出版しました。それが『1945 年 鎮南浦の冬を越えて』として全国版となったのです。

私が書いておきたかったのは、日本が 1910 年、朝鮮を植民地化して、日本の領土にしていた土地に住み着いた日本人が、敗戦後、敵地にいる状態となって、今こそ長年の恨みを晴らそうと、敵対行動に出る朝鮮の人たちが多かった時期に、私の一家は、父の教え子であったキムさん一家に、帰国船が出るまで、物心両面の援助を得たこと。ソ連軍大佐に私たちの借家を接収され、家族 7 人の家探しに困惑したとき、向かいに住むクリスチャンの朝鮮人母子が、小さな部屋を空けてくれて、1 ヶ月半住まわせてくれたこと・・。

キム氏は私の一家を助けたせいで、牢獄に入れられ、10 キロもやせましたし、オモニ親子は保安隊の巡回に怯えながらも、住まわせてくれました。彼らのような、時流に流されず、自分の信念に従い志を貫いて、助けてくれた人たちの存在を書き残しておきたいと思いました。

国からの引揚げ船は来ず、ソ連軍の使役と略奪が続くため、2 年目の冬越しは耐えられないと、「鎮南浦日本人会」の役員たちが、死に物狂いの交渉と準備で、1 万 6 千人を数回に分けて、脱出成功させたその気概も、書き残しておきたかったことでした。

私には宗教的信念などはありませんが、人としてこうありたいという思いはあります。経済優先よりも自然優先にして、子どもたちの未来のためにも、原発よりは自然エネルギーを使う方を選びたいです。いろいろ勉強しなくてはと、意思だけはありますが、超低血圧症ではあり、行動が思うに任せません。せめて維持会員として、陰ながらでも応援したいと思っております。

筆者プロフィール：高校、恵泉短大、東京女子大で英語の教鞭をとった。日本児童文学者協会会員。おもな著作に『やなぎ通りのスージーさん』、『あじさい寮物語3部作』、『おはなし玉手箱』など、翻訳に『ハリスおばさん モスクワへ行く』がある。